

「美貌」というステイグマ——徐訐『風蕭蕭』における美女表象——

杉村 安幾子

はじめに

中国の狭義の「現代（一九一九年から一九四九年）」という時代を考える時、「戦争」は切っても切り離せない重要なファクターとなる。日本において戦争が繰り返してはならない過ちであるのとは逆に、中華人民共和国の建国が抗日戦争の勝利および国共内戦での中国共産党の勝利の上に成り立っていることに鑑みれば、戦争の歴史や軍事は中国人民にとって輝かしく誇るべき栄光でこそあれ、決して否定的なニュアンスを帯びるものなどではない^①。

それゆえ中国において従軍将校や兵士の戦死は、盛大に追悼しなければならないものとなり、場合によっては英雄として顕彰される。それは矮小化の誹りを恐れずにとまどいていえば、死は顕彰されるべきものとそうでないものの二項に分類可能であるということでもある。国家と国家がそれぞれに大義名分を負って戦い、その中で死んだという事実においては、そこに二項対立などありようもないはずだが、戦勝国と敗戦国、軍人と民間人といった差異によって、結果的に全く異なる意味が付与されるのである。即ちある人物の戦争における死の意義は、国籍・民族・性別・職業など、その人物の身分や属性、社会的立場によって後世に決定され、或いは変更され得るのである^②。

本稿では徐訐（じょく）（一九〇八—一九八〇）の代表的長篇小説『風蕭蕭』（一九四四）をテキストとして、作中に描き出された三人の女性の死について分析する^③。彼女たちの死には太平洋戦争期という色濃い時代性が負わされており、彼女

たちに共通する諜報員という身分、また『風蕭蕭』が掲載された重慶の『掃蕩報』副刊^①という連載媒体に鑑みて、読者の愛国心・民族心の昂揚を直接喚起するものとなっている。ここにジェンダーの観点を加えると、若い女性的美貌という因子が、彼女たちの死の意味に深く関わっていることが指摘できると考えられるのである。

一・徐訏『風蕭蕭』中の三人の美女

徐訏は一九三七年一月、パリ大学（ソルボンヌ）在学中に執筆し、『宇宙風』半月刊に亘って連載され、翌年には単行本化された『鬼恋』によって一気に人気作家となった。「鬼恋」のタイトルにかけて「鬼才」とまで称されている。その徐訏が四三年三月一日から滞在先であった重慶の『掃蕩報』副刊で連載を開始し、翌四四年には成都東方書店によって単行本化され、二年のうちに五版を重ねる人気を得たのが、後に徐訏の代表作ともなった『風蕭蕭』である。

『風蕭蕭』は「敵国製品の広告、敵の哨兵、城壁の残骸の漆喰（一二頁）^②」が目に入る陥落後の「孤島期」と呼ばれる一九四〇年代上海を舞台としており、洋館、ダンスホール、カフェ、洋酒、欧米産のタバコ、チョコレート、お洒落なデザインのチャイナドレス、アクセサリ、ジャズ、クラシックなど、当時の上海を彩る要素をふんだんに取り入れ、また登場人物も中国文人だけでなく、欧米人、混血女性、日本の商人や軍人など、時代性と地域性を色濃く物語る設定を施している。さらに強い愛国心に基づく国際的な諜報活動、男女の疑似恋愛関係や友情、誰が敵か味方かわからない複雑な人間模様、先の読めない激しい起伏のある展開といった創作上の巧みな戦略によって、新聞の連載小説として読者を惹き付け、結果として『風蕭蕭』の爆発的人気によって一九四三年は現代中国文学史上、「徐訏年」と呼ばれるようになった。^③ 同時期に活躍した人気作家の無名氏（一九一七―二〇〇二）は、自作『北極風情画』（一九四四）について、友人が自分と徐訏を比較したと回想しており、^④ 実際、司馬長風は「戦時戦後の小説創作では、ある二人の作家の作品が最もよく売れた。それは徐訏と無名氏である」と述べ、『風蕭蕭』については「本書の卓越

した功績の一つは、構成の厳密性と完璧さにある。五〇万字近い小説において、人物、プロット、主題がそれぞれ収まるべき所に収まるようにびったり調和しており、無関係なものや破綻などはほとんどない。プロットの展開は秩序立ち、道理に適っている」と評価している。⁸⁾

「風蕭蕭」というタイトルは『史記』刺客列伝」第二六の有名な一段、荊軻が後の始皇帝である秦王暗殺のために出立する際に歌った「風蕭蕭として易水寒く、壯士一たび去らば復たび還らず」から取られている。作品のラストシーン、「私は」広々と果てしのない空の下、長い旅路へと踏み出した。風が吹いている。私は白や灰色の雲が東の方で舞い上がっているのを目にした(四五頁)との描写と呼応し、意志を強く持つて一人大後方へ赴く語り手の徐青年の心象を象徴しているだろう。尤も、徐は哲学研究が本業の青年であり、途中から諜報活動に参加するものの、基本的に作品中では狂言回しに過ぎず、『風蕭蕭』では彼の目に映った上海で国際的に活躍する諜報員たちの活躍が語られる。それらの諜報員で特に読者に印象を残すのは、ほとんどが女性であるが、その中から本稿では白蘋、梅瀛子、宮間美子の三人を取り出して見てみたい。この三人に注目するのは、作中諜報活動によって命を落とす、即ち死ぬ運命にあるのが彼女たちだからである。厳密に言えば、梅瀛子は命を落とすところは明示されていない。しかし、彼女が死を前提とした役割を担わされているのは明らかであるため、ここでは同列に扱うものとする。

まず、白蘋は上海屈指のダンスホール百楽門(ハクラク)の人気ダンサーである。重慶国民政府の諜報員でもあり、この白蘋の人物造型には、第一次世界大戦中にスパイとしてフランスで処刑された美貌のオランダ人ダンサー「マタ・ハリ」がモデルとなっている可能性がある。「明るい顔立ち、大きな眼に長い睫毛、両頬はふくらしており、薄い唇、真っ白な歯、笑うと百合が花開いたかのよう」(二〇頁)と形容される、圧倒的な生命力を感じさせる美女である。

それは初秋のことだったが、彼女は銀色のボタンのついた薄いグレーのチャイナドレスを着ていた。銀色の革靴に、髪にも銀色の花を挿し、クリーム色の男物のような丈の短い上着を羽織っていた。(二二頁)

長毛のシルバーフォックスのコートを羽織り、その下は雪のように白いイブニングドレス（二四六頁）

こうした人目を惹くお洒落な服装描写も添えられているのは、ファッションが美をより引き立てるからである。^⑨白蘋のこの服装の趣味に表れている銀色については、自宅も銀色だらけであるという偏愛ぶりを示しているが、徐が白蘋との会話で何気なく言った「僕は銀色の雰囲気は好きだけど、銀色にはいつも潜在的なもの寂しさがあるみたいで、かすかな憂いを感じてしまうんだ」（二四頁）という言葉は、才氣煥発で気が強いが、思いやり深く人情家の側面もある白蘋の不幸な未来を暗示している。白蘋はダンサーとして活躍しつつも諜報活動に身を入れており、日本の密偵に撃たれ命を落とすのである。

梅瀛子は父親が中国人、母親がアメリカ人であり、西洋と東洋の美を兼ね備え、イギリス・アメリカ・フランス・日本の青年たちから求愛されている上海社交界の花である。白蘋と梅瀛子は語り手の徐青年に対し、恋愛遊戯を仕掛けていくような、そうでないような思わせぶりな態度をとりつつ、親しく交流をしている。梅瀛子の外見は次のように形容される。

東洋の瞳に西洋の睫毛、東洋の口に西洋の下顎、鼻筋は高くびんとしているが太くはなく、柔らかな頬にすつきりとした眉毛、広々としたこめかみは上方に真っ黒くしっとりとした髪が配されている。（二八頁）

ダイヤモンドをボタンにした、純白の絹の半袖のチャイナドレスを着ていた。精巧な深緑色の翡翠に周囲を縁取られ、色白の肌には白粉の跡はなく、唇にはごく淡い紅がひかれているようで、言葉にできない艶やかさがあつた。（同前）

梅瀛子は真紅のバラに喩えられることもあり、パーティー会場に現れると会場中の視線を一身に集め、徐に「我々の世界で最も美しい女性であり、彼女と比較できる人はいない」(三七六頁)とまで語らせる紛う方なき美女である。実はアメリカの諜報員であり、目的のためには手段を択ばない冷徹な一面もある。それゆえ全体的にクールな印象を受けるが、白蘋の死後、彼女の弔い合戦とばかりに孤高に復讐へと立ち向かっていくさまは、作品後半の白眉であるといえよう。

興味深いのは、白蘋と梅瀛子の容姿に対しては、語り手徐の評価的眼差しが向けられることである。例えば、友人のアメリカ人軍医ステイヴンと「でも、梅瀛子はかなり良いプロポーションだ」「白蘋の方が一層若い感じがするだろう?」でも、脚の長さは気高さの象徴だよ。鶴と鶏の違いは脚の長さにあるからね」(五九頁)などと品評したり、「今夜、彼女〔梅瀛子・杉村注〕が打ちひしがれた様子で、澁瀬と輝いている白蘋の隣に座っていると、白蘋の方が確実に梅瀛子よりも生き生きと美しく感じられると気づいた」(三七六頁)のように、美貌の甲乙をつけている。徐は普段、彼女たちに対して常に穏やかで紳士的であり、決してわかりやすい好色な視線を向けはしないにも拘らず、内心では二人の美を競わせているのである。こうした眼差しによって、『風蕭蕭』における白蘋と梅瀛子の美貌は繰り返し確認されるのである。

三人目の宮間美子は、作品中盤以降になつてから登場するのだが、次のように紹介される。

私は彼女の着物の衿から、これこそ絵画の中の日本美人そのものだと感じた。しかし、顔立ちは完全に子供の活発さを表しており、古典的な雰囲気は決して濃くなかった。(中略)私が彼女の眼に注目すると、睫毛は長かったが、眼は永遠に視線を下に向けているかのようで、その印象はまさにカメラマンが人物写真の眼球に反射した光を修正してしまつた多くの写真が私に与える印象と同様、一種物静かで、少し神秘的であるとも言える。

(三三八―三三九頁)

その外見から、徐は彼女を二〇歳にはなっていないのではと推測するが、そのおしとやかな外見と慎ましやかな態度とは裏腹に、宮間美子は上海社交界を蛇のようにしたたかに渡りぬく日本の間諜であった。本名は郎第儀といい、満洲では秋雨三郎の名で男装をして暗躍し、川島芳子とのつながりもあるらしいという設定である。白蘋を殺害したのがこの宮間美子であることが暗示され、彼女は白蘋を殺されて怒りに燃えた梅瀛子によつて毒殺される。

『風蕭蕭』は物語の展開だけでなく、こうした美女たちの言動や、徐と彼女たちとの会話の、時には意味深な、時には辛辣な味わいが作品の大きな魅力ともなっている。そして、上記の三人は徐を取り巻く女性たちの中で、とりわけ美しく目を引く存在として描かれており、読者にその美しさが強く印象付けられる。しかし、言葉を尽くして強調される彼女たちの美は、単に読者の想像を豊かに楽しませるためのものではないのである。

二. 捐躯殉国

J・B・エルシュテインはその著『女性と戦争』において、西洋においては〈正義の戦士〉としての好戦的な男性と〈美しき魂〉として母性的イメーヂを付加された平和を愛する女性という構図が、長らく支配的な表象となつていと述べる^⑩。このことは西洋に限らず、上野千鶴子が「国民国家」が軍事力と生産力の増強を国家目標とし、「国民」を「人口」すなわち兵力と労働力とに還元したとき、「兵役」は「国民化」の鍵となった。その時、「国民」は「国家のために死ぬ名誉を持つ者」と「国家のために死ぬ名誉を持たない者」とに分断され、前者だけが「国民」の資格を得たのである。戦争は、ジェンダーの境界を平時に増して明確に可視化する」と指摘したことと呼応するだろう^⑪。しかし、エルシュテインは「猛々しい少数者」として実際に暴力的な行を行なった女性が少数ではなかったこと、また他方で男性にも非暴力を掲げた「平和的少数者」が存在した例を挙げ、男性≡暴力、女性≡平和という単純な二項対立の構造の虚構性も鋭く突いた^⑫。

実際、『風蕭蕭』に登場する前述の三人も、いわゆる前線に出て戦う兵士ではないが、暴力的な手段を用いて戦う

女性たちであることは間違いない。例えば、白蘋は徐を敵側の諜報員であると誤解する場面がある。彼女は銃を取り出して「今日の私のミッションはあなたを殺すことよ！」（二七四頁）と言うなり徐を撃つのである。徐が本能的に避けたために弾は左肩に当たったが、元々は徐の胸部を正確に狙ったものであった。さらに二発目は徐の左肩を撃ち抜いた。白蘋と徐の間の恋愛感情については明確には描かれないものの、互いを大切に思い合う友愛の情は示されている。真つ青な顔色で眼を真つ赤にし、全身を震わしながら徐を撃つこの場面においては、大切な友人ですら敵と認識すれば躊躇なく殺そうとする白蘋の堅固な意志を見て取れるだろう。そして、「約束して、これからあなたの偉大な魂は民族に捧げるって」「僕の魂は偉大じゃないけど、いつだって民族のものだよ。過去、現在、そして未来永劫ね」（二七六頁）との会話の後、白蘋は誤解に気付き「私を許して！」（同前）と泣き崩れる。

その白蘋の死は、次のように新聞記事になった。

米国スパイの有名ダンサー／有恒路にて逮捕を拒否し死す

パラマウントの有名ダンサー白蘋は、近来日本側からアメリカ海軍に雇われているスパイであると睨まれ、長らく調査の対象であった。今朝五時頃、白蘋は有恒路へ仕事をしにいったところ、日本側密偵の知る所となり、逮捕前となつたが、図らずも離れた所にいた白蘋の仲間が発砲し、密偵はその場で転倒絶命した。その時、他の密偵が発砲し、白蘋に命中、転倒絶命した。（四一〇頁）

この白蘋の銃殺には、日本の諜報員宮間美子が深く関わっていた。前述のエルシュテインの「戦士の物語のキーワードは栄光と名誉であり、名誉は肉体的勇氣に存する」〔傍点原著者〕との言葉に沿えば、諜報活動中に殉死した白蘋は、間違ひなく国家への忠誠と民族心に基づいた栄光と名誉の死であると見なされるに違ひない。

白蘋の死を受け、梅瀛子は徐に決然と「白蘋の死の負債は私が一人で決着をつける」（四二四頁）と復讐を誓い、

「言つとくけど、私はあなたよりずっと白蘋を愛していたの！」（同前）と告げる。白蘋と梅瀛子はそれぞれが孤島上海を代表する美女として親しくしつつも、ともに相手は敵の諜報員ではないかという疑いを持ちながら交流していたが、日本を敵とする方向性においては同様の志を持つ諜報員であると知ってからは義姉妹のような関係になっていたのである。そして、梅瀛子は徐に大後方へ行くように指示し、二人は「さようなら、大切な人、あなたの幸せを祈つてる」「さようなら、梅瀛子、僕は永遠に君のために祈るよ」と別れを告げる。結果的にこれが二人の最後の会話となる。

その数日後、徐は次のような新聞記事を目にして驚く。

宮間美子毒殺さる／原因究明するすべなし／犯人については捜査中

本紙特別通信…日本の令嬢宮間美子は軍部の報道部長の姪として、東京から当地へ来たばかりであるため宴会での付き合ひも頻繁であった。昨晚、パレスホテルでの宴会から帰来後、毒によつて死亡した（中略）このところ取り沙汰されていることだが、有恒路での殺人事件と関係があるとのこと。（四三五頁）

徐は梅瀛子の仕業だと悟る。宮間美子と梅瀛子は歴然たる暗殺者でもあったのだ。

その後、徐は梅瀛子が訪ねて来てくれることを期待するが、彼女は姿を現さず、居場所を問う徐に、彼女の仲間は「知つてたつてあなたには教えるわけにはいかない。彼女たちもあなたには会いたくないでしょうよ」（四三九頁）と答える。白蘋同様、徐を大切な友人と見なしていた梅瀛子は、義妹である白蘋のための復讐、さらにはより厳しい諜報活動に身を殉じる決意をしたことで、徐との永遠の別れを選び、その思いは一切揺らぐことはなかったのである。彼女の決意は、白蘋を殺され、仇として宮間美子を殺害した今、既に死地へ赴くことと同然であっただろう。徐を危険に晒さないように、彼には内地へ行くことを勧め、自らは一層苛烈な状況へ身を投じる梅瀛子は、「私たちの仕事は食

うか食われるかなの、この仕事は永遠に一部の犠牲と全体の勝利を引き換えに、一時的な犠牲と最後の勝利を引き換えにするものなの(二二七頁)と言い放つ、まさに大義のためには犠牲を厭わない(正義の戦士)として描かれている。いや、このように見てくると、梅瀛子のみならず、白蘋も宮間美子も銃殺や毒殺といった血の匂いに覆われた(正義の戦士)であると指摘できるだろう。無論、宮間美子は敵であるが、彼女たちが国や民族のために戦っていたという広い意味では志を同じくする。また、梅瀛子の諜報機関の上司であるステイヴン夫人が自らは動かず、指示を出すだけの存在であることと比せば、白蘋や梅瀛子がいざとなれば死をも辞さない実戦の兵士と見なされ、また自認していたことも間違いない。

彼女たちの死が壮烈であり、悲壮感が漂うものに描かれているのは、彼女たちがまだ若く美しく、それに加えて単なる事故死でも病死でもなく、民族と国家のためという大義名分に命を賭し、結果として散っていったからである。

三. 紅顔薄命——ステイグマとなった美貌

古今東西の物語には、決まって美しい女性が登場する。昔話においては、美しい女性は仮に生まれが貧しくても、ほぼ必ず高貴な男性から見初められて上昇婚をし、「幸せに暮らしました」とハッピーエンドが与えられる。他方、醜い女性には幸せな未来が与えられない。ラコフらは美貌の政治的力学を分析した著書の中で「美は権力や影響力の交換に関係するという点で政治的であるが、美人と見なされる見通しが、女性の持つ政治的道具、つまりは保証やおどしであるという点でも、政治的である」と述べ、美貌が諸刃の剣であることも指摘し、「おとぎ話、教訓物語、恋愛物語などによって、美は力という逆説に私たちは引きずり込まれる」と述べる¹⁾。いわば、こうしたおとぎ話の中では、女性の美貌が本人の意志とは無関係に武器となつていているということである。ところが、近現代に到り、こうした物語における美しい女性の運命に反転が見られるようになる。即ち、不幸が運命づけられるのである。

元々、演劇・映画・ドラマといった現実の人間によって演じられる可視化された芸術作品とは異なり、おとぎ話や

小説の中の美女はいくらでも美しくあれる。どのような形容をしようとも、美女たちは読者の想像の中で際限なく美しくなるのである。こうした美女たちは、作品の中で恋愛や結婚や、或いは冒険や戦争の中で波乱万丈な人生を送り、読者を楽しませる。その意味では、美女たちは消費される娯楽の一部であるといえるだろう。看過すべきでないのは、おとぎ話の美女たちに共通するのが「老い」が描かれていないということである。「幸せに暮らしました」は、或いは夫婦共白髪になるまでの生活を含意しているのかもしれないが、そこまで詳しく語られることは決してなく、美女は若い美女のまま作品世界は幕を閉じるのである。ここにはルッキズムだけでなく、エイジズムも指摘できるので、本稿でもまさに若い美女が作品中で命を落とす運命を与えられている点に注目したい。

既に見てきたように、『風蕭蕭』の白蘋・梅瀛子・宮間美子といった女性たちも、その美貌について語を費やされているが、昔話のような幸せな上昇婚というハッピーエンディング、安定した将来が示されるのではなく、白蘋は銃殺、宮間美子は毒殺という最期を迎え、梅瀛子にも壮烈な最期が暗示されて作品は終わる。二・で確認したように、彼女たちの死には愛国心や民族心ゆえに犠牲となった（正義の戦士）^① 像が投影されている。では、一・で見たような彼女たちの人目を引く美貌には何が仮託されているのだろうか。彼女たちの人物造型に、美貌という因子は必要であつたのだろうか。

徐が翌日の諜報工作は梅瀛子の代わりに自分が請け負うと申し出た際の二人のやりとりを見てみよう。

「私、綺麗かしら？」

「勿論」私は答えた。「まさに僕らの梅瀛子だよ」。

「それなら、今死ぬしかないの」彼女は言った。「そうじゃなかったら、私は一番美しい印象をこの世に残しておけないの。わかる？」（中略）

「あなたの最も美しい命は、あなたの研究に託されるわ。それは悠久の仕事として、長寿であればあるほど、ま

すまず美しい印象をこの世に残すでしょうね。でも私はね、わかっているの、私の今の印象だけが人々に永遠に記憶してもらえらるる価値があるって」(二二六頁)

梅瀛子は自らの美貌が文字通り武器であると自覚しており、そしてまた若い時にのみその価値があるということも理解している。梅瀛子のこのセリフに対し、語り手の徐がこの後に感じているのは翌日の工作が失敗に終わるのではないかと不安のみである。穿った見方をすれば、徐は梅瀛子の自己認識を追認しているとも取れるのではないだろうか。

戦争と女性をめぐる言説として、フィクションではないがスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』から、二つの女性の語りを以下に紹介する。「人を殺すつてむずかしいことよ。あたしは地下活動をしていたの。半年後に任務をいいつけられたの、ドイツの将校の食堂でウエートレスになれつて……若くてきれいだから……採用されたわ」。「……戦争中ずつと脚を傷つけられたらどうしようということばかり心配していました。私は脚がきれいだったの。男の人ならどうつてことないんでしょ？脚がなくなつたつて、それほど恐ろしくはありません。それでも、英雄だし、立派にお婿さんになれます。でも、女性が不具になつたら、もう将来は決まつてしまうんです。女性としては終わりです」⁽¹⁶⁾。ここからは戦争におけるジェンダーの非対称、戦時であるにも拘らず女性の若さと美貌に重きが置かれているのを見て取れるだろう。いや、戦時だからこそ本来的に潜んでいたジェンダー非対称が浮き彫りになっているのかもしれない。前述の梅瀛子のセリフも、このジェンダー非対称を照らし出している。徐の長期的な哲学研究が国家や民族への貢献となるのに対し、梅瀛子は若く美しい時に死なねば貢献になりはしないのである。恐らく、白蘋や宮間美子も意識的であるか否かは措くとしても、彼女たちの死を恐れない工作活動からは、梅瀛子と同様の価値観の下にいても考えられる。

このようなジェンダー非対称の空気の中で、白蘋や梅瀛子の若さと美貌は端的に「その死・犠牲をより輝かせるた

めの因子」であると言えるだろう。若い美女であればあるほど、その死が絵になり、悲愴感を増し、読者の涙と敵への憤激を誘うという構図である。¹⁷ 前述の梅瀛子のセリフは、それを明確に言語化したものである。ダンサーである白蘋、上海社交界の花である梅瀛子は、いわゆる「美」に対して報酬が支払われる人¹⁸ であるといえるが、皮肉なことに彼女たちの美へは、報酬だけでなく、読者の涙や同情も支払われている。ジェンダー化された彼女たちの美貌と死は、しかし実在はしないという虚構性への潜在的な安心感を背景に、いわば消費される対象となるのである。

「ステイグマ」という語がある。社会学者のアーヴィング・ゴッフマンは、「それは肉体上の徴をいい表わす言葉であり、その徴は、つけている者の徳性上の状態にどこか異常なところ、悪いところのあることを人びとに告知するために考案されたものであった」とし、未知の人について、最初に目につく外見から、その人のカテゴリーや属性、(社会的アイデンティティ)を想定することが可能としている。尤も、「ある種の者がそれをもつとステイグマとなる属性も、別のタイプの人には正常性を保証することがある」とも述べており、絶対的なものではないことも示されている。¹⁹ こうしたゴッフマンの説に従えば、おとぎ話では武器であり、賛美される対象であった女性の美貌が、『風蕭蕭』の中では当初は武器でありながら、結果的に不幸を運命づけられたステイグマに見えてきはしまいか。

エルシュテインの「ともかく、生命は脅かされるがゆえに、より大きく、より貴重に見えるのである」²⁰ との一文は多分に示唆的である。美貌がステイグマであるとすると、白蘋や梅瀛子らの美貌は不幸な未来を予兆するものでしかなく、彼女たちが美しく装い、人目を引けば引くほど、また徐との精神的な交流が盛んであればあるほど、彼女たちの命が貴重なものとして惜しまれる。それゆえ、梅瀛子の言った「私の今の印象だけが人々に永遠に記憶してもらえる価値がある」は正しい。『戦争は女の顔をしていない』中で検閲官がアレクシエーヴィチに告げる「あなたの小さな物語など必要ない、我々には大きな物語が要るんだ。勝利の物語が」²¹ との言葉は、徐の彼女たちとの友情や死を悼む心情を単なるセンチメンタリズムへと回収する。こうして若く美しい白蘋や梅瀛子の犠牲は、「大きな物語」勝利の物語」を彩るものとなる。

中川成美は、戦争によつて路上に放り出された最下層の女性を描いた池田みち子の『無縁仏』(一九七九)について、「痛めつけられ、酷使され、その挙句に廃棄される身体」と評した。²³⁾ 国家と国家の大義名分をめぐる戦争は、結果として戦勝国の論理が正義となる。『風蕭蕭』に描かれている太平洋戦争は連合国の勝利であり、中国では栄光と名譽の歴史の一頁となつた。とはいえ、その戦いに美貌ゆえに巻き込まれ、国への忠誠心ゆえに命を失うことになつた白蘋や梅瀛子については、彼女たちの美貌も同様に痛めつけられ、酷使されたとは言えないだろうか。

おわりに

再びエルシュテインを引こう。「女性は戦争の外部におり、男性は内部にいるから、男性は長い間、戦争の物語の偉大な語り手であつた(傍点原著者)」。無論、これは大文字の歴史の中でそう見なされてきたということを意味するが、大文字の歴史の中に徐訐の『風蕭蕭』を置いて見えてくるのは、ジェンダーの攪乱である。

『風蕭蕭』にはこれまで見てきたような(正義の戦士)である梅瀛子や白蘋だけでなく、諜報活動に利用されかけるも芸術の道を選ぶアメリカ人少女のヘレンや、娘をひたすら愛する母性の塊のようなヘレンの母親マンフィールド夫人といった、明らかに(美しき魂)のような女性たちも登場するのだが、他方、梅瀛子や白蘋の上司格として冷静に状況を判断し、指示を出すのが、決して実働はしないステイヴン夫人という、(正義の戦士)と(美しき魂)の両面を兼ね備えたような人物もいる。

こうした女性表象だけでも、単純にカテゴライズできるわけではないことに加えて、最も重要な攪乱の担い手は主人公兼語り手の徐である。彼は撃たれることはあつても、自ら撃つことは決してなく、諜報活動に参加しても、あくまでも梅瀛子や白蘋の指示の下で動くだけであり、哲学や芸術を語ることを愛するという点で、(美しき魂)の役割を負わされているかに見える。実際、上記のヘレンを諜報活動から芸術への道に引き戻すのは徐であり、それについては梅瀛子に散々に責められる。また、「何年も、私は民族抗戦に直接的に関わる仕事を担いたいと思つていたので

が、なんと今実現してしまった(二五六頁)と述べ、梅瀛子や白蘋の愛国心や民族への忠誠心への共感も示されるが、実際に戦うのは徐ではなく、梅瀛子や白蘋なのである。繰り返しになるが、徐は作中、彼女たちの美を鑑賞し、活動と死を見届ける単なる傍観者である。そして、そのように見てくると「風蕭蕭」というタイトルは、語り手徐の大後方への旅立ちを象徴しているのではなく、徐は「風蕭蕭として易水寒く」と歌った荊軻を見送りつつ筑をかきならした高漸離、或いはその悲愴な調べに涙を流した男たちの姿が投影されているだけなのかもしれない。

翻つて、白蘋・梅瀛子・宮間美子は『風蕭蕭』において、その美貌をもって死を予兆させ散っていく。彼女たちの若さと美に関する描写は物語の大きな魅力でもあるが、彼女たちが愛国心や民族への忠誠心と引き換えに犠牲となつたことで、物語は一層読者を惹き付ける。すなわち、生命が本来何にも代えがたいものであるのと同様、若さや美貌も瞬間的な尊いものであり、まさにそうであるからこそそれらの喪失が衝撃的でドラマチックなものとなるのである。彼女たちの美と若さは作中、消費され蕩尽された。結果として、『風蕭蕭』では女性の美貌がステイグマとして機能しているといえるだろう。

戦争はファンタジーになり得る。戦争を素材とした演劇・ドラマ・映画・小説・漫画・アニメなどのフィクションのみならず、戦闘ゲームなども加えれば枚挙に遑がない。また、「スパイもの」と括られるジャンルの小説・映画・ドラマなどにおいては、美人スパイが登場するのは常套手段であり、裏切りや欺き、冒険などのモチーフとともに読者や視聴者を楽ませってきた。情報技術の進歩によりスパイの重要性が著しく低下した現在から見れば、スパイ小説はもはやファンタジー以外の何物でもないだろう。こうしたファンタジーはあくまでも虚構であり、娯楽に過ぎない。ファンタジーになつた時点で距離感が生まれ、現実からは遠のくのである。しかしながら、フィクションやゲームの娯楽性の背後には、大義名分さえあれば国家には無辜の人々を殺すことができるという戦争の前提がありはしないか。そして、大義名分の前では、生命とともに女性の美貌も消耗品となるのである。一九四〇年代に多くの読者を魅了し、中国現代文学史に「徐計年」という一年をも作らした『風蕭蕭』の美女たちの死は、時代を経た今、政治

的な意味から壮烈と讃えられるよりも、寧ろ深い哀悼の意を捧げられる方がふさわしいように思われる。

注

- (1) 抗日戦争については、石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』（東京大学出版会、二〇〇四年十二月）に「帝國主義日本の侵略に対する民族と国家の存亡をかけた戦争であり、中国は八年間の戦いをへて、最終的には連合国の一員として勝利をおさめた」（二頁）とある。
- (2) 吉澤誠一郎は『愛国主義の創成——ナシヨナリズムから近代中国を見る』（岩波書店、二〇〇三年三月）において「死の意味は、生き残った他者が創出するものである。その創出が恣意的であって、時に政治的に利用されることがあるのは不可避であろう」（二〇二頁）と述べる。
- (3) 徐訐の経歴及び作風については拙論「徐訐『鬼恋』試論——悲恋への序奏」（『言語文化論叢』金沢大学国際基幹教育院外国語教育系紀要 第二一号、二〇一七年三月）を参照されたい。また『風蕭蕭』については拙論「徐訐と朝吹登水子」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第三六号、二〇一七年四月）がある。
- (4) 『掃蕩報』は国民政府軍事委員会によって江西省南昌で創刊された『掃蕩三日刊』を前身とし、一九三五年五月に改名された実質上の国民党の機関紙。抗日戦争勃発後、武漢や桂林を経て重慶に拠点を置いていた。一九三九年五月の日本軍による重慶爆撃後は抗日色を強めていた。蔡斐著『重慶近代報業図史初編（1897—1949）』（重慶出版社、二〇一七年一月）および蔡斐著『重慶近代新聞伝播史稿（1897—1949）』（重慶出版社、二〇一七年一月）を参照。
- (5) 徐訐『風蕭蕭』、『徐訐文集』第一巻・小説、上海三聯書店、二〇〇八年一月。以後、本稿における引用は全て本テクストに拠り、括弧書きでページ数を示し、拙訳を付す。
- (6) 陳乃欣等著『徐訐二三事』台湾爾雅出版社、一九八〇年、二〇頁。筆者末見により呉義勤・王素霞著『我心彷徨——徐訐伝』上海三聯書店、二〇〇八年一月より孫引き。

- (7) 無名氏「薔薇内幕——誰は「塔裡の女人」?」(『塔裡・塔外・女人』花城出版社、一九九五年一月)に、友人の黄遐遠が「みんなが君と徐訐を比較している」と英語で言ったと記している。(二二〇頁)
- (8) 司馬長風著『中国新文学史』下巻、昭明出版社有限公司、一九七八年二月、一〇〇頁・九五頁。
- (9) リタ・フリードマンは、心理学的視点から女性の美や肉体的魅力について分析・考察した『美しさという神話』(常田景子訳、新宿書房、一九九四年三月)において、「ファッションは、女性の美しさの代名詞だ。性別と力のシグナルとして、衣服は、その下にある身体と同様、女性の世界を規定する」と述べる。(二四〇頁)
- (10) ジーン・ベスキー・エルシュテイン著、小林史子・廣川紀子訳『女性と戦争』、法政大学出版社、一九九四年一月。
- (11) 上野千鶴子著『ナシヨナリズムとジェンダー』、青土社、一九九八年三月、三四頁。
- (12) 同注(10)エルシュテイン前掲書では、第五章を「女性——猛々しい少数者／非戦闘的多数者」、第六章を「男性——戦闘的多数者／平和的少数者」として詳述している。
- (13) 同注(10)、八三頁。
- (14) ロビン・トルマック・ラコフ、ラクエル・L・シエール著、南博訳『フェイス・ヴァリユー／美の政治学』ポーラ文庫研究所、一九八八年、二六一―二七頁。
- (15) 注(7)で見た、徐訐と同時代に活躍した無名氏の代表作である『北極風情画』『塔の中の女』(ともに一九四四)のヒロインたちも、絶世の美女として描かれ、前者は自死、後者は精神失調という不幸な最後を迎えている。
- (16) スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著、三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』岩波現代文庫、二〇一六年二月。前者は四〇頁、年離れた女性教師の語りから、後者は二八六頁、軍曹(通信班長)であったマリヤ・ニコラエヴナ・シチェラコワの語りからの引用。
- (17) ナオミ・ウルフは「美しくない女」に物語は生じない」として、トマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』を例に挙げ、「テスは美しい娘として目に留まる。だからこそすべてが——富も、貧困も、売春も、真実の愛も、縛り首も——彼女の身

にふりかかってくるのだ。(中略) 一方、節くれたった手で脱殻しているまわりの娘たち、テスの仲間たちは、美しいがゆえの幸せも呪いも受けず、泥のなかで単調な農作業を続けるばかり。そして、単調な農作業は小説にならないのだ」と述べる。(ナオミ・ウルフ著、曾田和子訳『女たちの見えない敵 美の陰謀』、TBSブリタニカ、一九九四年四月、八八―八九頁)

(18) 注(17) ウルフ前掲書では、「特にその『美』に対して報酬が支払われる人」との明確な定義づけのできる人々として、「ファッションモデル、女優、ダンサー、社交嬢など高級セックスワーカー」といった人に見てもらおう職業の人たちである。女性解放以前は、これらプロの美人たちは普通、名もなく、地位も低く、堅気ではないと思われていた(三九頁)とある。

(19) アーヴィング・ゴッフマン著、石黒毅訳『ステイグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房、二〇一六年、一三頁・一四頁・一六頁。

(20) 同注(10)、一一六頁。

(21) 同注(14)、三二頁。

(22) 中川成美著『戦争をよむ——70冊の小説案内』岩波新書、二〇一七年七月、六二頁。

(23) 同注(10)、三三〇頁。

(24) スパイ小説に関しては、鴨川啓信「欺きと裏切りの歴史・英国スパイ小説の100年」(『Osaka Literary Review』四二巻、二〇〇三年十二月)を参照した。

参考文献

小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝(二)』岩波文庫、一九七五年八月。

【附記】本研究はJSPS科研費JP20K00364の助成を受けたものです。(基盤研究(C)「美女と戦争——抗戦期中国の通俗小説に見る民衆の嗜好」)